

高麗川の虫たち



みなさんは高麗川をご存じですか？ふるさと坂戸を流れるこの川は、県下有数の清流であり、わたしたちにとってかけがえのない財産といえます。

そして高麗川は、ただ単に「清流」という言葉では言い尽くせないほどの、たくさんの魅力に満ちあふれています。それは、市街地のすぐそばを流れる川とは思えないほどの、自然の豊かさです。高麗川ではたくさんの昆虫や魚、野鳥などを観察することができます。チョウについては、年間をとおして毎年50種類以上観察することができます。その中には、ウラゴマダラシジミやヒオドシチョウなど、埼玉県レッドデータブックに記載されている貴重な種類も多く含まれます。

さて、ほとんどのチョウは、幼虫の時期に植物を食べて成長しますが、それぞれ食べる植物の種類が異なります。つまり、チョウの種類が多ければ、それだけ植物の種類も多いということになり、植物の種類が多い分、より複雑な生態系を形作っている、と考えられます。このことは、チョウだけでなく、他の昆虫や魚、野鳥など生き物全般にいえることだと思います。

この素晴らしい自然を保全していくために、私たちはどうすればいいのでしょうか？それには、まず高麗川の自然の豊かさを知ることだと思います。さあ、手始めにこの冊子を持って、高麗川を歩いてみましょう。きっと、宝石のような美しい虫たちに出会えることでしょう。



春

こまがわ はる すがた
高麗川で、春まっさきに姿を見せるチョウはモンキチョウです。そのあとモンシロチョウやスジグロシロチョウ、
ベニシジミなどいろいろなチョウが飛びはじめますが、はる こまがわ だいひょう
春の高麗川を代表するチョウといえば、やはりツマキ
チョウでしょう。なぜなら、た りるい はる あき なが きかんかんさつ
他のシロチョウ類は春から秋まで長い期間観察できるのに対し、ツマキチョウの
せいちゅう はる いちじき すがた み
成虫は、春の一時期しか姿を見せないからです。

はる
そして、春のチョウがひとつとおり すがた み
姿を見せたころ、こまがわ
高麗川ではサナエトシボの仲間が、なかま そくそく うか はじ
続々と羽化を始ま
す。



モンキチョウ

こまがわ はや とし がつ
高麗川では早い年だと 2月
の初めにはせいちゅう すがた み
成虫が姿を見
せます。

はくしよくがた はね
メスは白色型といって翅の
いろがオスに比べて白っぽい

こたい おお
個体が多いのですが、なか
にはきいろがた おな
黄色型といってオスと同

きいろ こたい
じ黄色の個体もいます。





ツマキチョウ

成虫は春しか姿を見せません。春に羽化した成虫はすぐに卵を産み、孵化した幼虫は成長し蛹になりますが、そのまま夏・秋・冬を蛹のままで過ごし、翌年の春に羽化するからです。

幼虫は、シヨカツサイなどの野生のアブラナ科の植物を食べて成長します。チョウの幼虫はふつう植物の葉を食べますが、ツマキチョウの幼虫は、花や実も食べます。



ツマキチョウ幼虫



ツマキチョウのメスは、翅の先まで白く、黄色い部分がありません。オス、メスともに裏面の網目模様が特徴です。

モンシロチョウ



モンシロチョウとスジグロシロチョウは、^{おな}同じシロチョウ科のチョウでアブラナ科の^か植物を食草として^{しょうぶつ しょうそう}いますが、モンシロチョウの方がキャベツやダイコンなどの^{さいばいしょうぶつ この}栽培植物を好むの



に^{たい}対し、スジグロシロチョウは野生の^{やせい}アブラナ科の植物を^{か しょうぶつ}好みます。^{この}

スジグロシロチョウ

^{はる こまがわ}春の高麗川では、モンキチョウ・ツマキチョウ・モンシロチョウ・スジグロシロチョウと、^{せいちゅう えっとう}成虫で越冬したキタキチョウを加えてシロチョウ科のチョウを5種類観察できます。そのなかで、モンキチョウのメス(白色型)・ツマキチョウ・モンシロチョウ・スジグロシロチョウの4種は、^{しゅ と}飛んでいるときは、^{はね しろ み}みな翅が白く見えるので、なかなか^{みわ}見分けが付きません。みんなひっくるめて「モンシロチョウ」と^{おも}思っている^{ひと おお}人が多いのではないのでしょうか？^{いちど と}一度チョウが止まっているところを、よく^{かんさつ}観察してみてください。それぞれ^{とくちょう}特徴があるので、ちゃんと^{くべつ}区別することができます。

シジミチョウのなかまも春の早い時期から羽化します。高麗川では、ベニシジミ・ヤマトシジミ・ツバメシジミ・ルリシジミ・トラフシジミ・コツバメの6種が観察できますが、コツバメは城山橋より下流では見たことがありません。



ベニシジミ

春から秋にかけて何度か羽化を繰り返しますが、春に羽化した個体の翅の赤が一番鮮やかに見えます。



ツバメシジミ

高麗川では、普通に見られるチョウです。オスの表面がメタリックブルーに輝くのが印象的です。



ヤマトシジミ

食草はどこにも見られる雑草のカタバミなので、高麗川だけでなく市街地でも普通に見られます。どこにも見られるチョウだからといって、馬鹿にしないでください。よく見れば翅は美しいし、オス・メスとも季節により翅の装いが変化します。



トラフシジミ

トラフシジミは、^{はる}春に羽化する^{うか}個体と
^{なつ}夏に羽化する^{こたい}個体で色合いが^{いろあ}だいぶ
^{ちが}違います。

でも、^{もよう}模様は^{おな}同じです。



ルリシジミ

^{こまがわ}高麗川では、ヤマトシジミやツバメシ
 ジミに^{くら}比べて、^{こたいすう}個体数は^{すく}少ないよう
 です。

^{しゃしん}写真のように^{はね}翅を開いて^{ひら}と
^と止まること
 は、めったにありません。



コツバメ

^{せいちゆう}成虫は^{はるさき}春先しか^{すがた}姿をあらわしません。

^{ねん}1年のうち、ほとんどを^{さなぎ}蛹で^す過しま
 す。

^{さいたまけん}埼玉県レッドデータブックで「**準絶滅**

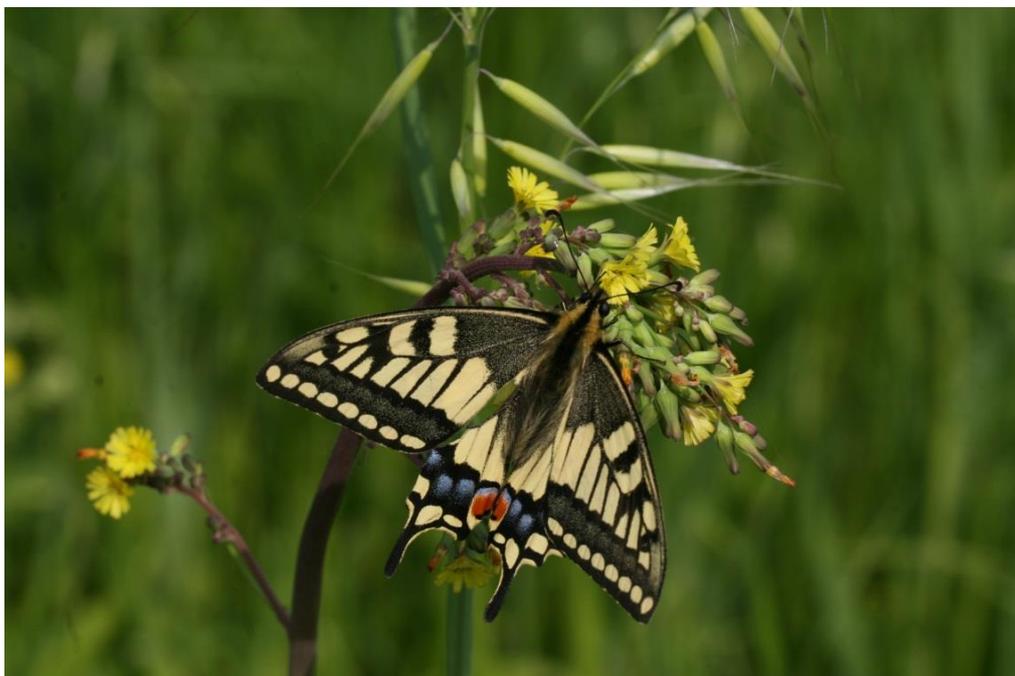
危機」に指定されています。

アゲハチョウの仲間なかまは、モンキチョウすこやベニシジミおくなどより少し遅れて姿すがたをあらわします。

高麗川こまがわでは、アゲハチョウ・キアゲハ・ジャコウアゲハ・クロアゲハ・アオスジアゲハが普通ふつうに見られ、まれにカラスアゲハ・モンキアゲハ・ナガサキアゲハみも見られます。また、ウスバシロチョウは、春はるしか姿すがたを見せません。

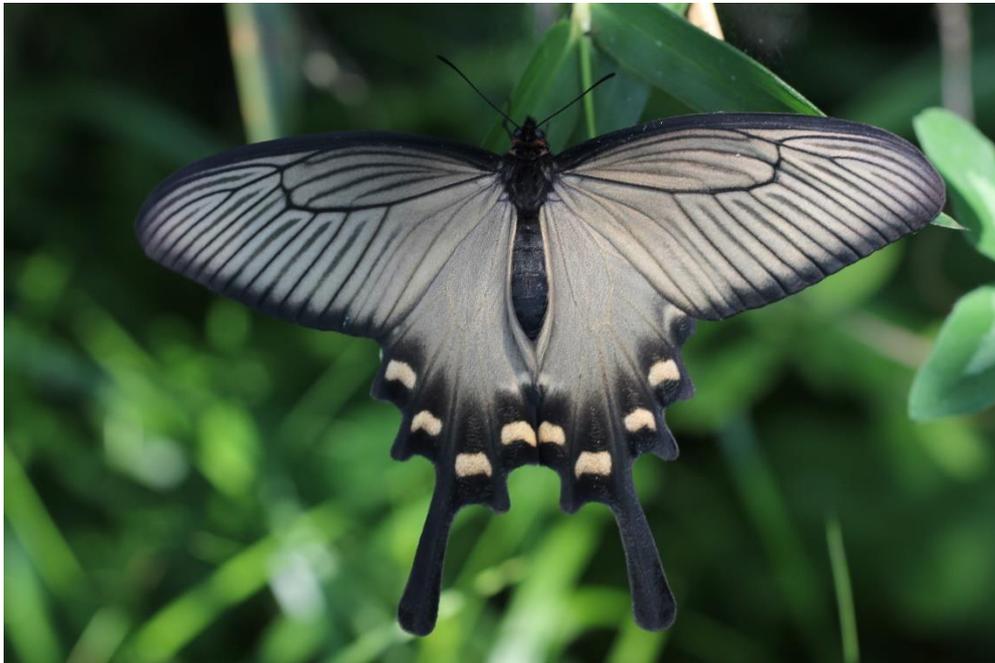


アゲハチョウ



キアゲハ

アゲハチョウの仲間なかまは、春はるに羽化うかする個体こたいと夏なつ以降おおに羽化うかする個体こたいで、大きさおおに違いちががある種類しゅるいが多いよう
です。春はるに羽化うかする方が小さく、夏なつの大きな個体こたいと比べると、まるで別種べっしゅに見えるものもいます。



かんきょうがっかん さくらちゅう
環境学館いずみと桜中

さかいの境のフェンスに、しよくそう食草のウマノズクサが生えており、まいとし毎年そこで発生を繰り返しています。

ひだり しゃしん 左の写真はメスで、オスはぜんたいくろはね全体に黒っぽい翅をしています。

ジャコウアゲハ



たまご 卵



ようちゅう 幼虫



さなぎ 蛹



ウマノズクサの花 はな



ウスバシロチョウ

なまえ
名前はシロチョウです
が、アゲハチョウの
なかま
仲間です。このチョウ
は1年のほとんどを卵
で過ごし、成虫は春し
か姿を見せません。



ウスバシロチョウの卵です。食草はムラサキケマンで
すが、4月の早い時期に成長を終え、ウスバシロチョ
ウが産卵する5月には、地上から姿を消してしまいま
す。そのため、ウスバシロチョウは来年ムラサキケマン
が芽を出しそうな場所の近くの、地面に落ちている木
の枝などに産卵します。



ギンイチモンジセセリ

セセリチョウの仲間^{なかま}は地味な種類^{じみ しゅるい}が
 多く^{おお}、ガの仲間^{なかま}と勘違^{かんちが}している人もい
 るようですが、チョウの仲間^{なかま}なのでお
 まちが^{まちが}間違いなく。

表面^{ひょうめん}は、こげ茶色^{ちやいろ}一色^{いつしよく}の地味^{じみ}で
 目立^{めだ}たないチョウ^{りめん}ですが、裏面^{うら}は

名前^{なまえ}のとおり銀^{ぎん}の一文字^{いちもんじ}が鮮やか^{あざ}かで
 す。埼玉^{さいたまけん}県レッドデータブックで

「準絶滅危惧^{じゅんぜつめつ きぐ}」に指定^{してい}されています。

夏^{なつ}にも羽化^{うか}しますが、残念^{ざんねん}ながら裏^{うら}
 の銀^{ぎん}一文字^{いちもんじ}が目立^{めだ}たなくなります。



ミヤマセセリ

名前^{なまえ}に「深山^{みやま}」とついでいますが、深^{ふか}
 い山^{やま}に行か^ななければ見^みつからないわ
 け^けではなく、平地^{へいち}にもい^{せいちゆう}ます。成虫^{せいちゆう}は
 春先^{はるさき}しか姿^{すがた}をあらわ^あしません。

埼玉^{さいたまけん}県レッドデータブックで「絶滅^{ぜつめつ}
 危惧^{きぐ} | A類^{るい}」に指定^{してい}されています。





こまがわ ^{はる} 高麗川では、春になるとホンサ
ナエやアオサナエ、ヒメサナエ、
オナガサナエなどサナエトンボ
なかま ^{そくそく} ^う ^か ^{はじ}
の仲間が続々と羽化を始めま
す。堤防の上の遊歩道ではなく、
な ^{かわ} ^{ちか} ^{ある}
るべく川に近いところを歩く
と、あしもと ^{くさ}
の草むらから、^う ^か
羽化し
たばかりの ^{こたい}
個体がふわふわと
と ^た ^{かんさつ}
飛び立つのを観察できます。



夏

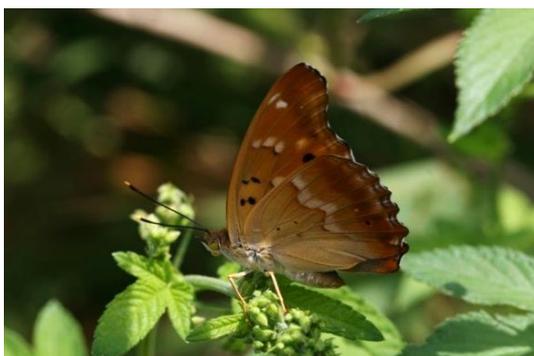
こまがわ なつ むし てんごく にんげん あつ なつ からだ むし
高麗川の夏は、まさに虫たちの天国です。人間にとって暑い夏は体にこたえますが、虫たちにとってはなんでもないので、さまざまな昆虫が活発に活動します。

なつ こまがわ だいひょう とざんどうとちゅう さわぞ
さて、夏の高麗川を代表するチョウといえば、コムラサキがあげられます。コムラサキは登山道途中の沢沿いでよく見かけるので、山のチョウという印象が強いのですが、高麗川の河畔林にはコムラサキの食樹であるヤナギの仲間がたくさん分布しているため、平地でも普通に見ることができるのです。



コムラサキ

こまがわ おつへがわ ひろ ぶんぶ かず おお こうせん かくだ むらさきいろ
高麗川から越辺川にかけて広く分布しますが、数は多くありません。光線の角度によって、オスは紫色に輝きます。メスは残念ながら輝きません。



こんちゅう あし ほん ひだり しゃしん ほん
昆虫の足は6本ですが、左の写真では4本にしか見えません。じつはコムラサキに限らず、タテハチョウ科のチョウは前足が退化しているため、4本に見えるのです。



ウラゴマダラシジミ

ていぼく しよくじゆ
低木のイボタノキが食樹ですが、
こまがわ かはんりんない ひかくてきおお
高麗川の河畔林内には比較的多い
ので、ウラゴマダラシジミも普通ふつうに
かんさつ はな
観察できます。イボタノキの花によく
あつ めあ
集まるので、イボタノキを目当てにす
れば見つかると思います。埼玉県レッ
ドデータブックで「ぜつめつ きく絶滅危惧ⅠA類」に
してい
指定されています。



アカシジミ

しよか そうきばやし み
初夏にクヌギやコナラの雑木林で見
かけるチョウです。高麗川の河畔林で
もクヌギやコナラは分布ぶんぷしており、ア
カシジミも見るができます。早朝
はやし したくさ
は林の下草したくさにおりていることがあり
ますが、ひのほが昇ると樹上じゆじように移うつってしま
うので、見つけにくくなります。



ウラナミアカシジミ

どうよう こまがわ かはんりん
アカシジミ同様、高麗川の河畔林で
み うら ふくぎつ もよう
見られます。裏の複雑なゼブラ模様
とくちよう
が特徴です。



ミズイロオナガシジミ

このチョウもアカシジミ、ウラナミアカシ

ジミ同様、^{どうよう}雑木林のチョウです。いずれ

も^{せいちゅう}成虫は初夏の^{しょか}一時期しか見られず、

^{いちねん}一年のほとんどを^{たまご}卵の^{じょうたい}状態で^す過ごしま

す。



トラフシジミ

^{はる}春に^{うか}羽化した^{こたい}個体(6ページ)と^{くら}比べて

みてください。^{とらふ}虎斑の^{もよう}模様は^{いっしょ}いっしょで

も、^{ぜんたい}全体の色合いが^{いろあ}違います。^{ちが}



キタキチョウ

^{なつ}夏と^{あき}秋に^{うか}羽化します。モンキチョウと^{おな}同

じく、^と止まっているときは^{かなら}必ず^{はね}翅を^と閉じ

ているので、^{ひょうめん}表面は^と飛んでいる^{とき}時しか

^み見られません。

^{ひだり}左がオス、^{みぎ}右がメスです。



ヒメウラナミジャノメ

はる ^{うか} 春にも羽化しますが、夏 ^{なつ} の方が数 ^ほ が多 ^{かず} いです。夏 ^{なつ} に高麗川 ^{こまがわ} を歩くと、このチョウ ^あ がどこにでもいて、目障り ^{めざわ} なくらいです。



ヒオドシチョウ

しよ ^か 初夏 ^{うか} に羽化し、しばらく活動 ^{かつどう} した後 ^{あと}、いつの間 ^ま にかいなくなります。(どこかで休眠 ^{きゅうみん} しているらしい)
つぎ ^{すがた} 次 ^み に姿 ^よ を見せるのは、翌年 ^{よくねん} の3月 ^{がつ} くらい ^{さいたまけん} になってからです。埼玉県 ^{さいたまけん} レッドデータブック ^{れい} で「絶滅危惧 ^{ぜつめつ き} III類 ^{るい}」に指定 ^{してい} されています。



ウラギンヒョウモン

ヒョウモンチョウ ^{なつ} というと夏の高原 ^{こうげん} を連想 ^{れんそう} してしまいますが、このチョウ ^{すく} は少ない ^{こまがわ} ながらも高麗川 ^{せいそく} に生息 ^{せいそく} しています。
さいたまけん ^{れい} 埼玉県 ^{さいたまけん} レッドデータブック ^{ぜつめつ き} で「絶滅危惧 ^{ぜつめつ き} IA類 ^{るい}」に指定 ^{してい} されています。



ゴマダラチョウ

はる ^うか ^{なつ}ほう
春にも羽化しますが、夏の方が

こた ^おいすう ^{なつ} ^{じゅ}えき
個体数が多いようです。夏は樹液に

あ ^みつ
集まるところをよく見ます。



アカボシゴマダラ

ほう ^{ほん}ちよう ^{らい} ^{ぶん}ぶ
放蝶により、本来は分布しないはず

かん ^ふとうちほう ^{つう} ^み
の関東地方でも普通に見られるよう

になってしまいました。食樹が在来種

のゴマダラチョウと同じエノキなので、

き ^{しん}ようごう ^{ばい}
競合が心配されます。



アサマイチモンジ

こ ^ま ^がわ
高麗川では、イチモンジチョウという

そっくりさんもありますが、アサマイチモ

ンジの方が数は多いようです。

さい ^{じゅん}たまけん ^ぜ ^{めつ}
埼玉県レッドデータブックで「準絶滅

き ^しぐ ^{てい}
「危惧」に指定されています。



アオスジアゲハ

しょくそう しょくじゅ こうえん がいろじゅ う
食草(食樹)が公園や街路樹に植

えられているクスノキなので、高麗

がわ 川だけでなくまちなかでもかんさつ
観察できます。

はる 春にもはっせいしますが、こたいすう すく
個体数は少

ないようです。



ゴイシジミ

こがた 小型のシジミチョウでかわいらしい

いんしょう 印象ですが、ようちゅう 幼虫はチョウにはめずら
珍しい

にくしょく 肉食です。さいたまけん 埼玉県レッドデータ

ブックで「**準絶滅危惧**」にしてい
指定され

ています。



ようちゅう 幼虫はササの葉につくアブラムシ

をた
食べます。

ゴイシジミ幼虫



アオハダトンボ

こまがわ なつ
高麗川では、夏になる
とハグロトンボまいとしが毎年
たくさん発生しますが、
ハグロトンボさきがに先駆け
て、晩春から初夏に
かけてアオハダトンボ
が姿を見せます。体
全体が金緑色に輝

とく はね かがや さいたまけん
き、特にオスは翅まで輝きます。埼玉県レッドデータブックで「**絶滅危惧II類**」に指定されています。



ホンサナエ

まいとしろやまばししゅうへん
毎年城山橋周辺で、アオサナエ
とともに飛んでいるのを観察でき
ます。埼玉県レッドデータブックで
「**絶滅危惧II類**」に指定されてい
ます。



ヒメサナエ

なかま
サナエトンボの仲間では、オジロ
サナエとともに小さい方です。
埼玉県レッドデータブックで
「**準絶滅危惧**」に指定されていま
す。



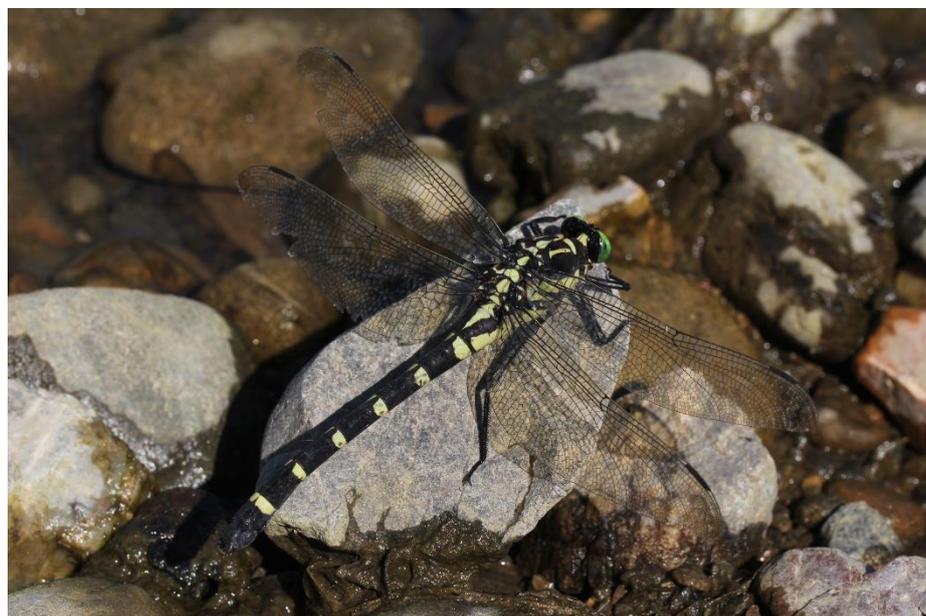
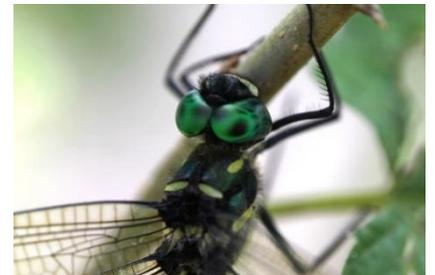
サラサヤンマ

こまかわ ひろ ぶんぶ
高麗川に広く分布して
いますが、どこにでもいるわけでは
ありません。埼玉県レッドデータ
ブックで「準絶滅危惧」に指定
されています。



コヤマトンボ

ひだり うか みせいじゅく
左は羽化してまもない未成熟
の個体です。成熟すると、下の
しゃしん ふくがん いろ きん
写真のように複眼の色が金
緑色に変わります。



コオニヤンマ

なまえ
名前にヤンマがついています
が、サナエトンボの仲間です。
こまかわ ふつう み
高麗川では普通に見られます。
うし あし ひじょう なが とくちょう
後ろ足が非常に長いのが特徴
です。

オニヤンマ

にほんさいだい
日本最大のトンボ
です。こまがわ
高麗川では
あまりみ
見かけませ
んが、すうねんまえ
数年前、い
つのもかんきよう
まにか環境
がつかん
学館いずみに
しんにゆう
侵入してきて、おどろ
驚
かされたことがあ
ります。



なつ お
オニヤンマは、夏の終わりに産卵
します。さんらん ほうほう ごうかい
産卵の方法は豪快で、
すいめんじょう せいし
水面上に静止し、そこから水面
か だろ なか いっき どうたい つ
下の泥の中まで一気に胴体を突
きさ
刺し、さんらん
産卵します。





ハラビロトンボ

トンボの仲間は、オスとメスで色合いが違う種類が結構います。このトンボもシオカラトンボと同様、メスは「麦わら色」、オスは左の写真のように「シオカラ色」です。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。



ウスバキトンボ

このトンボは、遠い南の国から発生を繰り返しながら、北へ向かって分布を拡げていく習性を持っています。でも、冬の寒さに耐えられず、関東地方では越冬できません。それでも、毎年同じことを繰り返しているのです。坂戸市あたりでは、6月下旬～7月に姿を見せます。



ハグロトンボ

高麗川の夏を代表するトンボです。アオハダトンボが姿を消した頃に姿をあらわします。その後だんだん数を増し、夏の間さまざまところで飛んでいるのを見かけます。写真は左がオス、右がメスです。



オオミスアオ

いっばんてき なかま 一般的にガの仲間は、チョウに比
べていやな印象を持っている方
が多いようですが、よく見ると美
しい種類がたくさんいます。オオ
ミスアオも、はっとするような鮮
やかな水色の翅をもった、美し
いガです。



ヒガシキリギリス

さいたまけん 埼玉県レッドデータブックで
「準絶滅危惧」に指定されていま
す。高麗川を歩いていると、チョ
ン・ギースという鳴き声をあちこ
ちでよく耳にします。けれども草
むらに隠れているため、めった
に姿を見せることはありません。



ニイニゼミ

こまがわ 高麗川では、毎年最初に鳴き声
を聞くゼミです。早いときは6月
の下旬から鳴き始めます。
みこと 見事な保護色で私たちの目をく
らませます。



アブラゼミ

ニイニゼミが鳴き始めてしばらくすると、ミンミンゼミとともに鳴きだし、夏の間高麗川をにぎわせてくれます。



ミンミンゼミ

アブラゼミと同様夏の間うるさいくらい鳴いています。高麗川だけでなく、市内各地で声が聞こえます。



ヒグラシ

ひるまはあまり鳴き声を聞きません。

あさはやゆうぐ朝早くか夕暮れにカナカナ…と

うつくこえき美しい声を聞かせてくれます。

しないかくしょ市内の各所にいますが、ミンミン

ゼミやアブラゼミに比べて数は少

ないようです。でも、しろやま城山にはたくさんいます。



ツクツクボウシ

いちばんさいご 一番最後に現れ、いちばんさいご 一番最後まで
 な 鳴いているセミです。こ 子どもの頃、
 ここのセミのこえをきくと「ああ、なつやす
 みももうおわりだな」とかんじた人
 おお も多いのではないのでしょうか。



ノコギリクワガタ

ぞうきばやし 雑木林のコナラやクヌギなどの
 じゅえき あつ 樹液に集まりますが、こまがわ 高麗川では
 かはんりん やなぎ じゅえき み 河畔林の柳の樹液でよく見られ
 ます。やなぎ じゅえき 柳の樹液には、コクワガタ
 やカブトムシなどのほかの甲虫だ
 けでなく、さまざま 昆虫たちが集
 まります。



さて、した 下の写真も同じノコギリク
 ワガタですが、うえ 上の写真と比べて
 みてください。まるでべっしゅ おも
 れるぐらい、おお 大あごのけいじょう ちが
 っています。このけいこう は、た 他のク
 ワガタもどうよう 同様なものが多く、
 おお オスのたいけい だいじょう ちが
 このけいじょう ちが
 ちが 形状が違います。



ツボト

なまえ
名前にトンボがついていますが、ト
ンボの仲間ではありません。

どちらかというトウバカゲロウの

なかま ちか なが しよっかく とくちよう
仲間に近いです。長い触覚が特徴
です。

うえ した
上がオス、下がメスです。



ナナフシ

からだぜんたい き えだ
体全体が木の枝のようです。動き
もゆっくりで、まるで枝が揺れてい
るようみに見えます。

秋

こまがわ あき しゅやく なかま こまがわ
高麗川の秋の主演は、アカトンボの仲間です。高麗川では、アキアカネ、ナツアカネ、マユタテアカネ、ミヤマアカネ、リスアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボの7種を観察できます。トンボでは、他にカトリヤンマやミルンヤンマなども運がよければ観察できます。

あき だいひょう なんほうけい まいとし
チョウでは、ウラナミシジミが秋を代表するチョウといえます。ウラナミシジミは南方系のチョウですが、毎年発生を繰り返しながら北へ分布を拡げていきます。でも寒い地方では、冬の寒さに耐えきれず越冬できません。それでも毎年同じことを繰り返しているのです。坂戸市では9月下旬から10月初旬くらいに姿を見せます。

ウラナミシジミ



キタテハ

なつ うか あき うか
夏にも羽化しますが、秋に羽化した個体の方が数も多く、さっそうとした感じます。成虫で越冬します。



ミドリヒョウモン

まいとしあき ^{すがた} 毎年秋になると姿をあらわし、
 いつの間にかいなくなってしまう
 ます。秋に産卵しますが、食草の
 スミレではなく、木 ^き の幹 ^{みき} などに
 さんらん
 産卵します。



ツマグロヒョウモン

このチョウを市内で初めて見たの
 は、平成18年8月の坂戸よさこ
 いの日でした。それ以来毎年そ
 の数を増してきて、今では市内の
 どこにでもいる普通のチョウにな
 っています。かつて分布は関東よ
 り南 ^{みなみ} の暖 ^{あたた} かい地方 ^{ちほう} と言われて
 いたのに、いったいどうなってい
 るのでしょうか？これも地球 ^{ちきゅう}
 温暖化 ^{おんだんか} の影響 ^{えいきょう} なのではないでしょうか？
 （上がメス、下がオス）
 春 ^{はる} から発生 ^{はっせい} を繰り返 ^く っていますが、
 秋 ^{あき} に他のチョウ ^た が少 ^{すく} なくなっ
 たときに、存在 ^{そんざい} 感を ^{かん} 増 ^ま すように感
 じます。



アカタテハ



ヒメアカタテハ



どちらも高麗川で普通に見られますが、アカタテハの方が見かける機会は少ないようです。



ルリタテハ

翅の表面がルリ色の美しいチョウですが、裏面を見てください。木の幹の模様になじみすぎて、なかなか見分けが付きません。クヌギなどの樹液によく集まるので、この保護色は結構有効かもしれません。





ウラギンシジミ

はね りめん なまえ ぎんいつしょく
 翅の裏面は、名前のとおり銀一色
 です。

おもて いろ ちが
 表はオス、メスで色が違います。オ
 スがオレンジ、メスは水色です。夏
 にも羽化しますが、秋の方がずっと
 めにすることが多いです。



ムラサキシジミ

ムラサキツバメ

ムラサキシジミ、ムラサキツバメともに夏と秋に羽化しますが、秋の方が個体数は多いようです。ムラサキツバ
 メは、かつては近畿地方以西の暖かい地方に分布していましたが、最近では坂戸市内でも普通に見られるよ
 うになりました。これもツマグロヒョウモン同様、地球温暖化の影響でしょうか？



マユタテアカネ



ミヤマアカネ



アキアカネ



ナツアカネ



リスアカネ



コノシメトンボ

こまがわ み 高麗川で見られるアカトンボの仲間、なかま この6種とノシメトンボがふつう み 普通に見られます。リスアカネとコノシメトンボはこたいたすう すく 個体数が少ないようです。しゅう あき ノシメトンボは、雌雄ともに秋になってもあか いろ 赤く色づきません。



カトリヤンマ

こまがわゆうほうどう ある
高麗川遊歩道を歩
いていると、いきなり
くさむらや木の枝から
すーっと飛び立つの
で驚かされます。で
も、すぐにヤブに入
り込んでしまうので、
写真を撮るのにはい
つも苦労させられま
す。



ミルンヤンマ

なまえ ゆらい
名前の由来は、イギ
リスの地質学者ジョ
ン・ミルン氏だそうで
す。高麗川ではあま
り見かけないので、
個体数は少ないと
おもわれます。



トンボの複眼の色は、種類によっても違うし、オスとメ
スによって違うものもいて、様々な色に美しく輝い
ています。でも、残念なことに死んでしまうとこの輝
きを失ってしまいます。



ショウリョウバッタモドキ

かんきょうがつかん
環境学館いずみのすぐそばの、
こまがわ ていぼう み
高麗川の堤防でも見つけられま
す。ショウリョウバッタよりずっと
ちい と よわよわ かん
小さく、飛び方も弱々しい感じで
さいたまけん
す。埼玉県レッドデータブックで
じゆんぜつめつ き く してい
「準絶滅危惧」に指定されていま
す。



トノサマバッタ

なつ あき
夏から秋にかけて、ショウリョウ
バッタや他のバッタとともに、
こまがわ ていぼう げんき と まわ
高麗川の堤防を元気に飛び回っ
ています。写真はオス、メスのペ
アですが、どちらがオスかわかり
ますか？
(答えは32ページ)



ハラビロカマキリ

オオカマキリやコカマキリととも
こまがわ かせんじき ていぼう
に、高麗川の河川敷や堤防で
ふつう み
普通に見られます。

冬

昆虫にとって、寒い冬は活動しづらく、ほとんどの種が活動を一時停止します。つまり冬眠です。その状態は

卵、幼虫、蛹、成虫とさまざまで、越冬対策も種によってそれぞれ違います。



ツチイナゴ

バッタの仲間は卵で冬越するタイプが多いですが、

ツチイナゴは成虫で冬を越します。

ゴマダラチョウ



幼虫は、食樹のエノキの落ち葉にくっついて越冬します。



アカボシゴマダラ



ゴマダラチョウ同様、エノキの落ち葉にくっついて越冬します。



コムラサキ

幼虫は、^{ようちゅう}食樹であるヤナギの木の^{しょくじゆ}幹や枝の割れ目に、^{き みき えだ わ め}体を入り込ませて^{からだ はい こ}越冬します。ですから、^{えっとう}探すのが^{さが}非常に困難です。
^{ひじょう}非常に^{こんなん}困難です。



ベニシジミ

幼虫は、^{ようちゅう}冬の^{ふゆ}間^{あいだ}ギシギシなどの^{は た}葉を^{せいちゆう}食べながら^{はる}成長し、^{うか}春に羽化します。



ナナホシテントウ



テントウムシの^{なかま}仲間は、^{せいちゆう}成虫で^{ふゆ}冬を^こ越す^{しゅるい}種類が多い^{おお}です。

30 ページの^{こた}答え…^{うえ}上がオスです。トノサマバッタに限らず、^{かぎ}バッタの^{なかま}仲間は^{ほう}メスの方が^{からだ}体の^{おお}大きい^{しゅるい}種類が多い^{おお}です。



坂戸市環境学館いずみ

令和3年2月12日改訂